若越郷土研究
21/3

大野盆地の古墳時代（前篇）

―北陸における地域研究―

中司照世

Ⅰ はじめに

福井県人となって約三年半、暇々にあちこちの山を歩き廻ってきた。こうして今日まで横山・酒生・御茸山・原目各古墳群などの踏査をひととおり終えた。

前稿に引き続き、越前各地の古墳群の様相を踏査による「発掘手段を用いない考古学」的方法で探りつつ、確認できた事を資料化し、かつ紹介し、考える素材にしてゆきたい。また地域研究をより系統的な調査にする為、今後も漸次「場」を移してゆく事を考えている。

今回は昭和四十九年の踏査、及び、大野市教育委員会の協力を得て昭和五十年に県が行なった分布調査(注一)を基礎資料として、大野地域を取り上げる。地域調査報告の冒頭に大野を選んだのは、従来考えられていた様相が大きく変わったので、その緊急報告の意味からである。

Ⅱ 過去の調査と新知見

一般に我々が「奥越」と呼んでいる旧大野郡域は、最近までほとんど正式な考古学的調査は行なわれなかった。この点で、当分野の調査・研究に立遅れの著しい福井県においてさえも、ほとんど手つかずの空白地帯であったといえる。和泉村や旧西谷村を除くと、わずかに大野市落合遺跡を帝塚山大学堅田直氏、勝山市三室遺跡を大野市文化財保護委員長吉田森氏が部分的に発掘(注二)され、大野市大矢戸古墳を斉藤優氏が視察・報告(注三)されているに過ぎない。

これらの調査から遡ると、大正時代に上田三平氏による若干の報告(注四)と、さらに江戸時代に「越前国名蹟考」(注五)を現わした井上翼章が砦・城・館跡をかなりの数で記載しているのがみられる。

この様な調査の散発的な状況は昭和四十三年発行の「全国遺跡地図（福井県）」(注六)作成にあたって大きく変化し、登録された遺跡数は

大野市　四十七カ所（旧西谷村を除く）
勝山市　二十五カ所

となった。そのうち大野盆地内の古墳は

大矢戸古墳（登録番号　百七十）
北　古　墳（登録番号　百七十一）
中　古　墳（登録番号　百七十二）
南　古　墳（登録番号　百七十三）

の四基である。

ところがその後奥越地域にも土地改良及び開発の波が襲い、ここ二・三年で部分的にしろ発掘調査の行なわれたものはかなりの数にのぼる。例えば、大野市佐開遺跡（土地改良）・同右近次郎遺跡（宅地造成）・勝山市本郷遺跡（土地改良）・同滝波刀清水遺跡（区画整理）・同幕根遺跡

（土地改良）等である。

また、この状況に対処する為の分布調査が実施され、新たに百六十七ケ所の遺跡が確認された。なかでも古墳の基数の伸びは著しく、大野地域だけでも先の四基が百二十七基となり、前方後円墳の存在も判明した。しかし、この様な急激な増加も、かって山稜線上の正式な分布調査が実施された事がなく、ごく必然的な帰結と言える。

Ⅲ　「大野地域」内の古墳分布

大野盆地は九頭龍川が勝山方面へ流れ出る一部分を除き周囲を山嶺で囲まれ、平地の広さは東西で約十三キロメートル、南北で約十キロメートルの盆地である。このなかを九頭龍川・真名川の両大河川と、清滝川・赤根川等の中小河川が貫流しているが、自然的環境において一つの孤立地域となっている。そして風土的同一性をも持っている点で、単一の「地域」として把える事ができる。

当地域で昭和五十年度末現在、百二十七基の古墳（及び方形台状墓）が確認できており、それらは六～三十八基で前期の小古墳群を構成している。分布はほとんど盆地西域の各低丘陵上に集中しており、図1のA～Iがそれらの各群で、他地域の如く同一丘陵地区に集中していない。

しかし、この散在状態から、複数の首長が並立していた事を想定するのは困難である。なぜなら、当地域内において継起的な首長墓の遷移が伺え、前述の

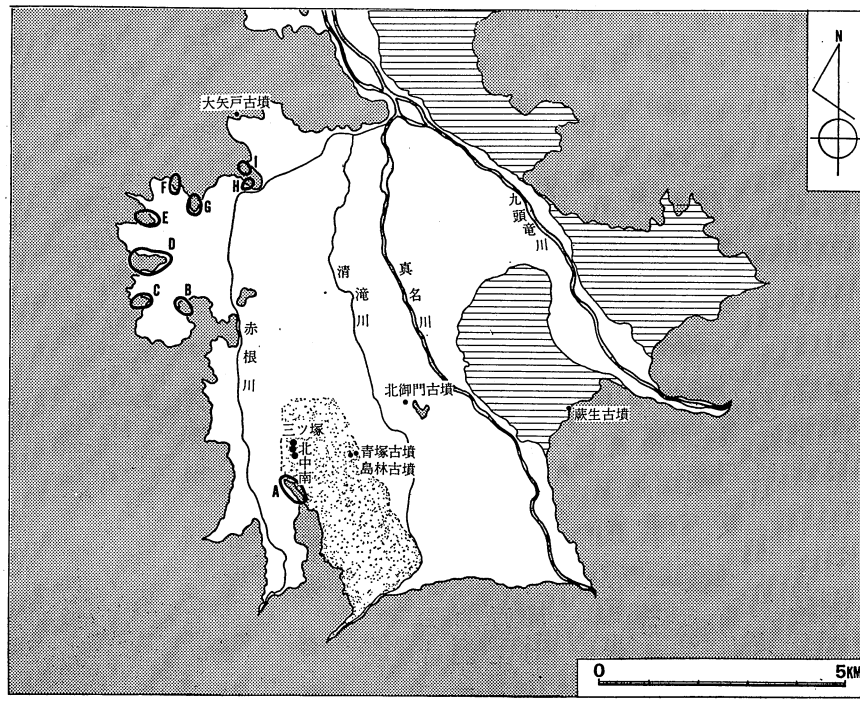


図1　大野盆地の古墳分布図（A～Iは前期の支群、黒点は後期古墳）

単一性とも関連して、「政治的な単位地域」(注七)として把握する事ができるからである。総基数も福井平野縁辺の丸岡・松岡・御茸山古墳群など他の「地域集団」の墳墓数に匹適し、「大野古墳群」として把握する事に抵触しない。そこでこの地域の古墳を右の様に総称する。

さて、後日「地域」双互の比較を行なう便宜上から、大野の古墳に次の様な番号を符しておきたい。

(例)

0—一—二

0・・・大野古墳群

一・・・一号

二・・・遺物番号二番

(ただし認識番号制は一層の複雑化と混乱を将来する事が多いので、既に命名されている古墳についてはそれに準拠する。また、未命名のものについては支群番号名を第一義的に使用し、全体番号も副次的に使用する。)

各古墳群(支群)の構成は次のとおりである。

A 御城山支群(三十八基)

B 犬山支群(十二基)

C 丁支群(十三基)

D 花山支群(八基)

E 稲荷山支群(九基)

F 東稲場支群(六基)

G 山ケ鼻支群(十六基)

H 目録支群(八基)

I 御茶ケ端支群(九基)

Ⅳ 後期の古墳

今回の分布調査までに知られていた古墳は、偶然にも全て後期古墳と考えられるものであった。この四基に、従来良く知られておりながらも、古墳として記載もれであった四基の後期古墳が追加でき、総数は八基となる。就中、大矢戸古墳は最も有名であり、時期的に前後するが、まず後期古墳から取り上げてゆきたい。

目下考えられる後期古墳は表1のとおりである。以下、各古墳の概要と、合わせて後期と考えられる点について述べる。

大矢戸古墳(0—一)

この古墳については次章で改めて触れ

	古墳名(番号)	墳形(規模m)	内部主体	副葬品・備考	立地
1	大矢戸古墳(0—一)	円墳(一四)	横穴式石室	須恵器六個体分出土。市教委保管	段丘先端
2	北御門古墳(0—二)	円墳(一五)	横穴式石室?	経石出土。経塚に再利用か。	平地
3	青塚古墳(0—一二五)	円墳?(?)	横穴式石室?	刀出土。消滅	平地
4	島林古墳(0—一二六)	円墳?(?)	横穴式石室?	刀・勾玉・小玉出土。消滅	平地
5	北古墳(0—三)	円墳(一三)	?	周溝あり。墳頂に墓石あり。	平地
6	中古墳(0—四)	円墳(二三・五)	?	周溝あり。盗掘穴あり。	平地
7	南古墳(0—五)	円墳(二〇)	?	周溝あり。南東に崩落。	平地
8	蔵生古墳(0—一二七)	円墳?(?)	?	直刀・須恵器出土。消滅	山麓

表1 後期古墳一覧表

る。かって山口次郎右衛門氏によって所蔵され、今日大野城に陳列されている須恵器が当墳出土のものである。古墳には「ジンガマ」の俗称もあるとの事である。

北御門古墳（0―二）

氾乱原上に立地しており、従来「北御門経塚（登録番号百七十九）」と呼ばれていた。一字一石経の経石確認の報告もあるが、(注八)踏査では全く認める事ができなかった。すぐ近辺に城址も存在し、現在も墳丘裾に五輪塔の地輪が横転しているなど、後世の二次的使用の可能性が強い。

墳径約十五メートル、高さ約二・八メートルで、もと三メートル余りの高さがあったものと考えられる。南―三十四度―東の方向に崩落があり、それに沿って三十～五十センチの河原石多数が露出している。これらの石は横穴式石室の構築材とみられ、配材に河原石を用いている点で、真名川・清滝川に近い地理的様相を良く現わしている。

この塚の古墳・時期比定の当否は、氾乱原の開発時期を決定する一指標となり得る事を追記しておこう。(注九)

青塚古墳（0―百二十五）(注十)

木ノ本扇状地東部を清滝川が削ってできた、小河岸段丘の先端に存在したとの事である。背後の原野開拓で破壊され、刀が出土したと伝えられている。

島林古墳（0―百二十六）(注十一)

青塚のすぐ西に存在したとの事で、立地は全く同様である。青塚より大きく、同じ様に「石むろがあった」との事から、横穴式石室を内部主体とするものらしい。青塚出土と伝えられる刀・勾玉・ガラス小玉はこの古墳のものとの事である。両墳とも消滅した今日、後期古墳であるとの断定は困難であるが、伝えられる概要やその立地からも蓋然性は非常に高い。

三ツ塚古墳群

三基とも周溝を巡らし、ほとんど接して造られている事から、この名称がある。木ノ本扇状地西軸線の、赤根川の浸蝕地形へ移る傾斜変換点に立地している。規模はさほど違わないものの、外観では中古墳が他の二基を圧している。墳頂は平坦面をなさず、周溝や立地からも後期と考えられる。

北古墳（0―三）

現在升本家の墓地となっているが、あまり大きく削られているとは思えない。径は約二十二メートルと二番目に大きいが最も低く、高さ約二メートルに過ぎない。わずかに周溝が見受けられる。

中古墳（0―四）

占地は最も赤根川寄りである。墳形も三基中で最大で約二十三・五メートル、高さ約三メートルで中央部分は攪乱されている。また周溝も最も幅広いらしく、今日もその跡を良く残している。

南古墳（0―五）

径は最も小さく約二十メートルであるが、高さは約三・五メートルと最も高い。南―三十度―東の方向に崩れており、あるいは横穴式石室の崩壊によるものかもしれない。周溝の地表面計測値は約六メートル

である。

蕨生古墳（0―百二十七）

不詳な点が多いが地城内における後期古墳数は僅少であり、全体の評価にも大きい影響を与える事からもあえて表記しておく。

かって学校建設のさい、須恵器・直刀破片が出土したとの事である。（注四）地形は山麓の為傾斜面をなしている。

次に資料紹介を兼ねて、大矢戸古墳の特徴と出土品に触れ、また踏査資料から大野の古代史にどこまで迫る事ができるのか試みてみよう。

V　大矢戸古墳（0―一）

一　古墳と副葬品

立地と墳丘

山麓の傾斜をもつ段丘先端に築かれている。径約十四メートル、高さがもと約三メートルはあったと考えられる円墳である。山側を掘割って墳丘を築成しており、傾斜地に営まれている為その大部分は地山削り出しによるものと考えられる。現在は封土が大幅に流失して天井石が露出しており、特記すべき外部施設は認められない。

石　室

南―六度―東に開口する両袖型横穴式石室で、玄門部には石を縦に配置している。石室の各部分の計測値は表2のとおりで、両袖部分の張り出しは各々七～十センチで、あまり顕著ではない。天井石は三枚。そのうち一枚は現在落下している。奥壁には大きい立石を配し、その右側にできた間隙をやや小さめの石で埋めている。内部にはかなりの流込土があるが、玄室両側壁の腰石は各々三個で、その上に四、五段に五十～九十センチの石を積み重ねている。この用材は周辺の山膚に多く同様な石が露出している事からも、比較的容易に工面できたものと考えられる。

計測部位＼規模	単位 m
石室全長	5.78
玄室長	2.60
玄室奥部幅	1.39
同高	1.70
同中央幅	1.47
同袖部幅	1.37
玄門部長	0.65
同幅	1.14
羨道部長	2.53
同幅	1.33

表 2　石室各部分計測値一覧表

副葬品

正式な調査を経て出土したものでなく、欠落が多いと考えられ、副葬品としてのセットになっていない。現在須恵器六個体分があり、うち実測可能なものを図2に示した。

。杯蓋（0―一―一）

口縁の四分の一程度の破片である。復原口径十二・六センチで、暗い灰色の焼成は良いものである。横ナデは左まわりである。

。高杯（0―一―二）

杯部は一の蓋と類似の形を示すが沈線を持つ。口径十三・五センチ、器高十四・八センチ、脚裾径十二・四センチ、暗灰色で焼成は良好。口縁端はやはり丸くおさめ稜

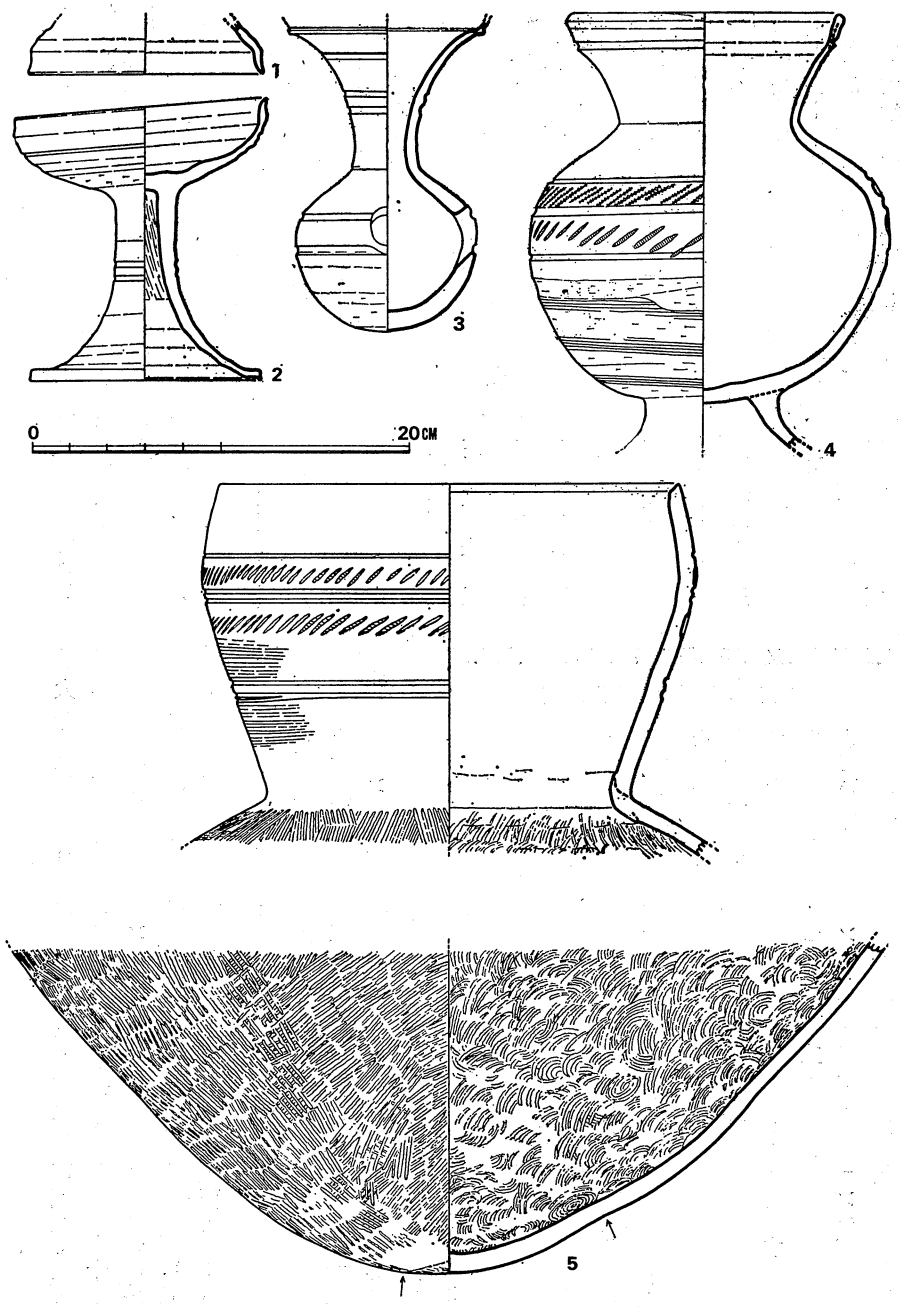


図2　大矢戸古墳出土須恵器

をなさない。調整は左まわりの横ナデで、内面底部には仕上げナデが見られる。外面の底部はヘラ削りされ、脚部の横ナデとともに左まわりである。他方、脚中央部の二本の沈線は右まわり引きで、内部にはシボリ目が認められる。

。碗（0―一―三）

口縁部は欠くが、胴部径九・六センチ、焼きの悪いもろい灰白色のものである。口頸部に横ナデが見られ、底部はヘラ削りされ（左まわりか？）、胴部沈線の施文後に穿孔している。

。台付壺（0―一―四）

台の裾は欠失している。口径十四・八センチ、胴部径十九・二センチ、壺の高さ二十・三センチである。碗ほどではないが焼成の悪いもので灰白色に近い。口頸部は左まわりの横ナデ、胴部は三本の沈線を左まわりで施した後、工具による連続刺突文をつけている。この二段の施文は各々異なった工具を使用し、上段の方が鋭い。胴下半部はカキ目調整の後、やはり左まわりでヘラ削りし、台部を接合している。また、胴内面には横ナデ、底部には仕上げナデが見られる。

。甕（0―一―五）

口縁の形状の若干異なった甕で、口頸部と底部の一部分が残っている。復原口径二十四・四センチ、器高は七十センチを越える大形品と思われる。焼成は良好で灰色。口縁部には自然釉がかかっている。この部分に上から一本・二本・二本の三段に沈線を巡らし、間に連続刺突文を施している。またカキ目も部分的に見る事ができる。体部外面は全面に平行タタキが行なわれており、底部には焼き台の痕があり、その径は十一・五センチである。口縁部は内側に傾斜し、内部は横ナデされている。頸部附近には巻き上げ痕を残しながら、以下あて板の同心円文を残す。製作にあたっては、体部の調整を行なった後、口頸部の接合をしている。

この他に堤瓶か平瓶の一部と思われる一個体の小破片がある。

以上が本墳から出土した須恵器の全てであり、各個体に認められる回転痕によると、ロクロは右まわりである。これはその回転に右まわりが圧倒的多数を占める時期に照応しており、陶邑のⅡ期に比定される（注十二）ものであり、さらに限定すれば六世紀末のものである。この須恵器の示す年代は、横穴式石室の配石状態からの想定時期にも矛盾しない。

大甕は通常墳頂などの墳丘上や墓道などからの出土例が多いものであり、これら六点の須恵器は当時使用された器種内から、各一点ずつ埋納されたかの様な趣さえ示している。

他の副葬品については現在知る事が困難であるが、同様な規模であると考えられる蕨生古墳、また青塚古墳や島林古墳の出土品をもってその一端を窺う事ができよう。

これが大矢戸古墳である。ではその被葬者はどの様な人物であろうか、次にそれを検討してみよう。

二　地域内に占める位置

立地からの観察

図1に示した如く八基は散在している。そして、大矢戸古墳は現大矢戸部落の背後にあり、段丘先端に立地するものの、谷奥の為それを望む事のできる範囲は限定されている。後期古墳としては、きわめて通有な立地をしているのである。同様な立地を示すのが蕨生古墳で、前面に塚原の段丘を擁し山裾である。この地区は戦後開拓されたもので、明治二十五年の九頭龍川流域図（注十三）にも明らかな如く、周囲はほとんど山林原野であった。

ところが他の六基は平地に存在しており、北御門・青塚・島林各古墳は氾乱原にある事から、その墳丘はかなり離れた地点からも望遠できたと考えられる。また三ツ塚古墳群も現在は部落の背後であり視界は良くないが、赤根川流域の可耕地を臨む良好な地点であったと考えられる。

ここでまず

。平地に立地するグループ

。山麓に立地するグループ

に分類でき、大矢戸古墳は当地域の古墳築造者層内では、劣弱なグループに属する人によるものである事が想定できる。

墳丘からの観察

次に各々の墳径を比較してみると

。三ツ塚古墳群

。北御門古墳・大矢戸古墳

の二群に弁別できる。前者の径は二十メートル前後、後者は十五メートル前後である。この他、不明の三基の古墳も後者に属するであろうと考えられる。

しかしながら、先の立地とも関連して、この後者のグループ内にも差異が伺えるのである。北御門・青塚・島林の三古墳は平地に造られ、その墳丘のほとんどが盛土であると考えられるのに対し、大矢戸・蕨生両古墳は大部分が地山利用であると思われる。それらの墳径はほぼ同規模とはいえ、その築成にあたって両者の投下労働力総量の差は大きい事が指摘できるのである。よって先の二グループはさらに

Ⅰ　三ツ塚グループ

Ⅱ　北御門グループ

Ⅲ　大矢戸グループ

に分割でき、大矢戸古墳の被葬者は三段階の階層内では最下層に属する事が推察できる。

内部主体からの観察

今日この地域内において他に横穴式石室かと考えられるものは、北御門・青塚・島林の三基である。ところが北御門古墳は埋没しており、他の二基は消滅して対比資料として使用できない。またその他のものは不明である。ここでは次の点を指摘するに留めておこう。

先にも触れた如く、大矢戸古墳は周辺数十メートルの範囲に無数の岩石がみられ、石材の入手は容易であったと思われる。ところが北御門古墳は石材の河原石の大きさから、少し離れた所から運搬せねばならず、（注十四）また青塚・島林両古墳も同様である。さらには、三ツ塚古墳群が横穴式石室であった場合もまた同様に考えられる。

副葬品からの観察

これも他の古墳のものは伝聞であり、か

つ大矢戸古墳にも欠落が考えられ対比できない。そこで再度当古墳出土の須恵器に目を向けると、六点中碗・台付壺の二点が焼成不良品である事が注目される。

以上の観察を綜合すると

Ⅰ　円墳　径約二十メートル　平地　盛土？

Ⅱ　円墳　径約十五メートル　平地　盛土　横穴式石室

Ⅲ　円墳　径約十五メートル（以下か）　山麓、地山利用、横穴式石室

の盆地内における三つの階層差が認められる。大矢戸古墳は通有な様相を示しながら、最下層のグループに属する事がほぼ明らかになった。

Ⅵ　他地域の調査から

今まで地域内の古墳の様相を探ってきたが、ここでその内容を最も良く知る事ができ、普遍的な様相をもつ大矢戸古墳を媒介に、先の三階層が何に該当するのかを調べてみよう。

北陸は一般的に後期古墳が少く、それは盆地内の基数にも顕著に現われている。その為詳細な対比は困難であるが、群単位で調査されたものとして鯖江市天神山古墳群の三ツ禿支群を取り上げてみる。（注十五）

三ツ禿支群は十四基で構成される山麓傾斜面の後期古墳群で、そのうち九基の横穴式石室内蔵墳の玄室床面積と、副葬品を表記したのが表3である。

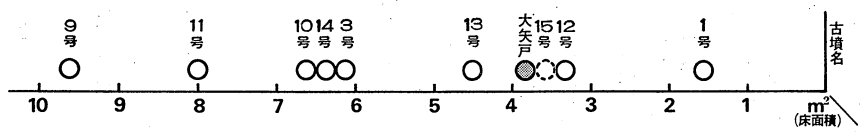
（なお墳丘調査はなされておらず、図と記述が一致しないので墳径は取り上げない。また同様に玄室も容積値を使用すべきであるが、面積値を採用した。）

まず床面積では

Ⅰ　八～十平方メートル（九・十一号）

Ⅱ　六～七平方メートル（十・十四・三号）

Ⅲ　五平方メートル以下



古墳名／種別	1号	12号	15号	大矢戸古墳	13号	3号	14号	10号	11号	9号
土器	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
玉類		○		？	○	○	○	○	○	○
鏃		○		？	○	○	○	○	○	○
刀子	○	○		？	○	○	○	○	○	○
小刀		○		？	○	○	○	○	○	○
刀				？		○	◌	○	○	○
馬具				？					○	○

表3　三ツ禿支群玄室床面積及び副葬品一覧表

（十三・十五・十二・一号）

に分ける事ができる。同様に副葬品構成からも

Ⅰ′　馬具・刀・その他の副葬品を合わせ持つ古墳（九・十一号）

Ⅱ′　馬具は欠くが、刀を持つか鍔からその存在が伺え、その他の副葬品を持つ古墳（十・十四・三号）

Ⅲ′　副葬品中に馬具・刀を持たぬ古墳（十三・十五・十二・一号）

に分けられ、双方は対応している事が明らかである（一号は問題があるがここではⅢ及びⅢ′群内に含めておく）。この様な点については、中国地方の現象から今井・近藤両氏の指摘（注十六）をみており、古墳被葬者の属性は副葬品に最も端的に反影きれている訳である。さらに、単に「騎兵」と「歩兵」のみでなく、「歩兵」内の階層差をも具現していると言える。

これを大矢戸古墳についてみると床面積からⅢグループに入り、必然的にⅢ′に入る事も考えられる。さらに附言すれば、よって未収納の遺物が何であるかも推察できる事となる。

前述の事由で今回表記しなかったものの、墳丘規模及び占地・墳丘築成にあたっても、当然その差異は反影しているものと思われる。

Ⅶ　地域の様相

表4に掲げたのは、両地域の群の特徴を摘出したものである。

（ただし、ここで注記しておかねばならぬが、三ツ禿支群には表3・4で取り上げたもの以外にも五基の後期古墳が存在している。特に東小支群最高所には、当群の盟主と考えられる最大の畠中古墳があり、西小支群には小形竪穴式石室を内部主体とする小円墳四基がある。しかし、畠中古墳は五世紀代へ入る後期初頭の造営になるもので、他の四基も時期不詳の為今回は除外した。それは既に述べた如く、現在大野で最下層と考えられる大矢戸古墳が横穴式石室を採用しており、総基数八基の時期も群集墳盛行期に求めているからである。他にも、盆地内に二・三基の後期に属すると思われる古墳が存在する。ところが、これら数基はその時期比定において不確定要素がさらに多く、資料の厳密性を著しく低下させるものである。かつ、その一部

	禿群 三ツ古墳	後群 野古墳 大期
該当基数 / 総基数	9 / 82	8 / 127
（百分率）	（11%）	（6%）
分布	〔群集〕二小支群からなる。	〔散在〕群集しない。
立地	山麓傾斜面	大半は平地。二基のみ山麓。
群内規模対比	群内に大差は認め難い。	三ツ塚古墳群と他の古墳の間に差あり。
墳丘築成	全基ほとんど削り出し。	大半は盛土。二基のみ削り出し。
副葬品	轡・剣・刀・小刀・刀子・石突・鏃・耳環・玉・須恵器・土師器	刀・勾玉・玉・須恵器（判明しているもののみ）

表4　大野・三ツ禿両群対照表

は畠中古墳に合致する年代と性格を想定しているからでもある。この様に限定した場合種々の問題も生起するが、続篇で追補する予定である。）

まず総基数内に占める後期古墳の割合がかなり違い、大野は三ツ禿の約二分の一である。（注十七）次に分布では、三ツ禿が二小支群からなる群集形態をとるのに対し、大野は一部が複数である他、群集しない。（注十八）また三ツ禿が通有な後期古墳としての立地を占すのに対し、大野では同様な立地を示すものの方が少ない。同一群内においての規模の対比では、三ツ禿に大差が認め難いのに対し、大野では明確に二グループに分かれている。また墳丘築成は立地にも関連して、前者の多くが削り出しによっているのに、後者は盛土の方が多い。内部主体・副葬品については後者が発掘を経ていないので対比は困難であるが、大差の無いものであろう事が、想定できる事を記しておこう。

これらを概観すると、三ツ禿に当時期の古墳として普遍的な現象が多く現われており、これに相違する諸点が、大野の特質的様相を現わしているものと解する事ができよう。

中古墳は種々の要素からも盆地における首長墓と考えられ、相接して占地している他の二古墳は、親縁な関係を持つ首長に連らなる系譜の被葬者の墓と考えられる。

また基数が少く、散在的であるのはどの様な状況を示しているのであろうか。

三ツ禿にその一例として見てきた如く、越前においても群集墳盛行期には、かなりな基数の古墳が一地区に集合して造営される。とりわけ横山古墳群・酒生古墳群・御茸山古墳群の三群には、数十基の当該期古墳が群集している。これら大規模の群集墳は、有力豪族と擬制的族縁関係を結ぶ事を契機として営まれたと言われている。これらの群中には、前方後円墳やその径が二十メートルを越す円墳で、該当地域の首長墓と思われるものがある。また、径が十～十五メートル前後の通常の大きさの円墳だけでなく、その径十メートル以下の小規模な円墳も加わっている。そして各円墳の占地にあたっては、強い規制が加えられた事が、加賀市二子塚古墳群（注十九）の調査結果等にも現われている。

古墳には階層差が顕現しており、群集墳の示す様相は各構成員に強い規制力が及び、首長が弱小な階層まで系列内に組み込み得た事を示している。

翻って、大野地域では首長は弱小階層まで強力に組織化し得ず、また各有力階層もなお強くその主体性を保っていたものと考えられる。当時期としては珍しく各地区に散在し、平地に位置し、盛土による古墳が多いのも、その様な情況の反影と考えられる。そして先に二地域の現象差として表出した如く、既に当該期にこの様な地域差が浮び上ってきているのである。

Ⅷ　前篇の終わりにあたって

対比資料として天神山古墳を俎上に載せる事となった。貴重な発掘資料の実見できる当古墳群は、多大な意義を担っていると言える。調査委員の方々による再検討を切望し、非礼の点は御詫びしておきたい。

ただ従来言われてきた如く、当県における研究の遅れは発掘資料の僅少性にあるのではなく、我々自らの不明と浅学に由来していると考えている。分布調査さえ不完全な現状であり、踏査において、同一地域で回を重ねる度に、従来の把握が改変させられる事をもってしても、まさに自分の問題である事を思い知らされるのである。むしろ今日では、大阪や関東でその古墳のほとんどが破壊されつくした時、裏日本と呼ばれる後進県が、その後進性ゆえにこそ大きい可能性を内包しているとさえ思えるのである。

さらにもう一つ。Ⅶ章で述べた事はただ単に千四百年前の現象でなく、まさに今日の大野の問題として考えるべき事でもある。既に私などが述べるまでもなく、大野は中央都市や北陸道ベルト地帯から離れた僻遠の地である。しかし、そこは古い街並と清水を持った秀麗な山並に囲まれる盆地であり、けっして「〇〇の小京都」などではあり得ない。この街の歴史は清水に依るところが非常に大きく、地下水についての綜合調査が必要である事は、既にイトヨの調査においても指摘されている。（注二十）そして、それは単に水収支における経済的原理上からのみの課題ではなく、「大野」が今後も「大野」としてあり続けるべき姿の模索でもある。

「水不足」やいたずらな「観光開発」は大野らしさを破壊するもの以外ではあり得まい。機能的なだけの街に住み上水道の水を飲むくらいなら、もはや小東京と化した福井市の方が合理に徹しただけましだと思えるのだが……。その上、自らの郷土に誇りが持てなければどこへ住んでも同じであり、なにも若者が山深い盆地に留まる理由も見い出し難いのではあるまいか。その様な意味においてもイトヨの調査は「大野学」（注二十一）の根幹に触れるものではなかったのでないであろうか。

本文は、大野盆地について大野市教育委員会松本正治、天神山古墳群について青木豊昭、また松村忠祀・平井恵子等の方々からの教示と助力のもとに成ったものである事を銘記しておきたい。

（昭和五十一年二月一日）

（注）

一、参加者は青木豊昭・桜井隆男・木下哲夫・車崎正彦・今橋浩一他である。

二、吉田森「三室遺跡の概要」福井県文化財調査報告第十三集　昭和三十八年

三、斉藤優「福井県大野市大矢戸古墳」日本考古学年報十一　昭和三十七年

四、上田三平「越前及若狭地方の史蹟」三秀舎　昭和八年

五、井上翼章「越前国名蹟考」（越藩本）文化十三年

六、「全国遺跡地図（福井県）」国土地理協会　昭和四十三年

七、近藤義郎「月の輪古墳」昭和三十五年

八、二・三の本に述べられている。ただし地籍は字塚である。

九、南方の医王寺には縄文時代後期の遺跡が存在しており、地貌形成の時期想定に示唆を与えている。この医王寺遺跡の地籍は字河原である。

十、下庄史談会の方々に御教示を得ている。また吉田森他「大野のあゆみ」大野市　昭和四

十三年にも触れられている。

十一、地元の方から教示された。

十二、田辺昭三「陶邑古窯址群I」平安学園考古学クラブ　昭和四十一年　須恵器に関しては同氏の御教示を得た。

十三、科学技術庁資源調査会「九頭龍川沿革図」昭和四十一年

十四、近年土地改良が行なわれ、縦横に排水路が掘られたが、出土する河床礫は小さいもののみであり、石材の供給源はより河川の中央部に求めるべきであろう。

十五、斉藤優他「天神山古墳群」鯖江市教育委員会　昭和四十八年

十六、今井・近藤「群集墳の盛行」『古代の日本　中国・四国』角川書店　昭和四十五年

十七、天神山古墳群には他に経ケ岳・春慶寺山両支群にも対応する後期古墳があるとの事で、ここでは天神山・山頂支群などの西半域のもののみ取り上げた。

十八、大矢戸古墳については周辺に他の古墳の存在が想定されているが、単独墳の可能性が強い。注三文献に同じ。

十九、田嶋・湯尻「加賀市二子塚遺跡群調査概報」石川県教育委員会　昭和四十九年

二十、田中・平井・加藤「大野盆地における陸封型イトヨの生態」大野市教育委員会　昭和四十八年

二十一、郷土学については、倉田公裕「郷土学（秋田学）とは」『秋田県立綜合博物館設立構想』秋田県　昭和四十七年　に適切な指摘がなされている。